

神靈ルーをめぐるローカリティの再編 ——インド北東部モンパ社会の事例から——

長岡 慶

Reconfiguration of Locality for Living with “*kLus*”: A Case of the Monpas in Northeast India

NAGAOKA Kei

Abstract : This paper aims to clarify negotiations involved in the reconfiguration of locality in the contemporary Himalayas by focusing on the interaction between deities called “*kLus*” and the Monpas through an anthropological perspective. The Monpas, a Tibetan Buddhist community living in a border area of northeast India called their land “*Mon yul*” or Mon region which is located in the Tawang and West Kameng districts in Arunachal Pradesh. The Monpas used to go across the Himalayas for trans-Himalayan trade, taxation, Buddhism training and pilgrimage to Tibet. But this mobility was ruptured by the Indian practical control in 1951 and the closure of border by the India-China War in 1962. Mon region became a geo-politically important “national frontier” for the Indian government and the government began a military buildup and accelerated the incorporation of the Monpas into the Indian regime without enough concern about the local context.

This paper describes various interactions between *kLus* living under lands and watering places and the people in the local context. A *kLu* is thought to be protective deity of the house, field and village for the Monpas. They understand conditions of living environment and their health through their interaction with *kLus*. In the modern situation of the region, the paper clarifies destructions of lands by the border war and recent development projects of constructing roads and buildings increase Monpa’s anxiety about growing bad affection to *kLus* deeply linked to the people’s life. In this way, they began to negotiate with others to keep good relationship with *kLus*. Their practices are motivated also by the recent social movement by the Monpa elites for preservation of their “culture” and “identity” based on Buddhism. But the paper argues that the reconfiguration of locality is conducted not only by the elites and government but also by the lay people through their practices and negotiations for concerned with how to live with *kLus*.

キーワード : モンパ、インド北東部、神靈ルー、国境、ローカリティの再編

Keyword : Monpa, Northeast India, Deity of *kLu*, Borderland, Reconfiguration of locality

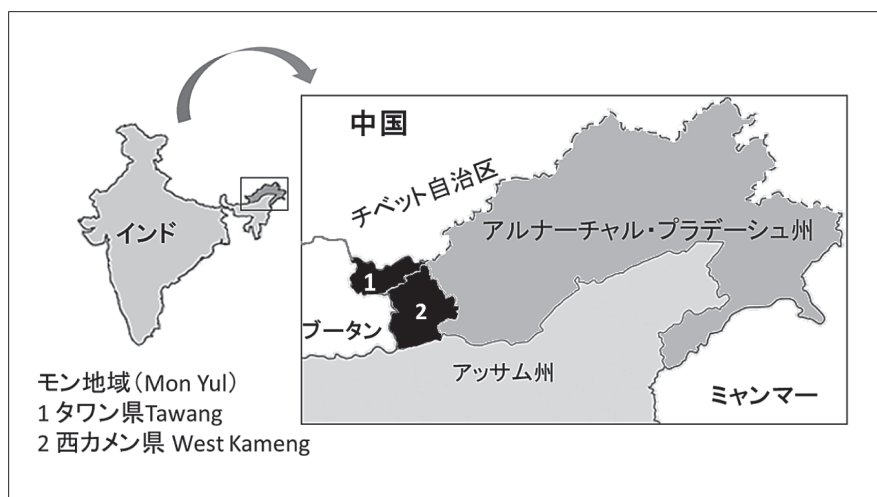
1 はじめに

本稿は、インドのチベット系社会における神霊と人々の関係が、20世紀後半の国境紛争や開発を通じてどのように変化したのかを人類学的視点から分析することを通じて、現代ヒマラヤにおけるローカルな社会空間の再編のありかたを論じることを目的とする¹。

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州西部に位置するタワン県と西カメン県は、中国のチベット自治区やブータンと国境を接し、チベット仏教徒のモンパ (Monpa) と呼ばれる人々が多く居住している (図1)。2つの県にまたがる地域はかつて「モンユル (Mon Yul)」とよばれ、チベットの支配下にあった (以下、モン地域)。1951年にインド軍が進行してモン地域は事実上のインド領へ移行することとなったが、中国政府はモン地域を含めたアルナーチャル・プラデーシュ州の一部を中国領であると主張し、1962年に中印国境紛争が起こった。紛争後、インド政府はモン地域を「国境の防壁」として重視するようになり、軍事基地や道路の建設を推し進めた。モンパ社会は、国境紛争後の開発を通じてインド世界とのつながりを強めることとなったのである。

モンパにとって、ルー (kLu) とよばれる神霊は古くから重要な存在とされ

図1 調査地の位置関係



¹ 原語 (サンスクリット語) の発音に合わせて「ヒマラヤ」と表記する。

てきた。ルーは、チベット・ヒマラヤ世界において地底や水底に棲むとされる神霊で、いわゆる敦煌文書のチベット語文献にすでにルーの記述があることから、少なくとも11世紀までにはその存在が語られていたと考えられている(スタン1971:260)。ルーに関する具体的な事例研究はあまり多くなく、宮坂はその背景についてインド仏典がチベット語に翻訳された際にサンスクリット語のナーガ(龍神、蛇神 *Naga*)の訳語としてルーが用いられてきたために、ルーはナーガと混同または同一視され、チベット・ヒマラヤ世界固有のルーの文脈や意味についてあまり注目されてこなかったという点を指摘している(宮坂2007)。近代化によるラダック社会の変容を論じたワイリーは、ラダックで農業や牧畜業を離れて別の仕事に従事する人々が増え、各地で環境汚染や破壊が急激に進むなかで豊穡の神や土地の守り神であるルーに対する崇拝が失われつつあるということを述べている(Wiley 2004)。しかし、本当にヒマラヤ地域の国境紛争やその後の開発は、ルーと現地の人々との関係に断絶をもたらした(あるいは、もたらしつつある)のであろうか。ルーの存在は、ワイリーが述べる農業との結びつき以外にも日常生活の様々な場面で語られているのであり、「近代によるローカリティの衰退」という構図を早急に持ち出すのではなく、それぞれの場面や状況ごとにルーをめぐる現地の認識や実践をとらえ、歴史的、社会的文脈に位置づけなおす必要がある。したがって、本稿はモンパ社会を事例とし、現地の人々のルーをめぐる様々な語りや実践から、国境紛争や開発の経験とともにルーがどのようにとらえられてきたのか、さらに現在の日常生活や社会運動においてルーの位置づけはどのように変化したのかを明らかにする。なお、現地調査は2010年1月から2016年3月にかけて継続的に実施し、インド北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州タワン県および西カメン県に居住するモンパを主な調査対象とした。とくに本稿に挙げる事例の多くは、長く滞在したタワン県で収集されたものである。調査手法は、参与観察と非構造化インタビュー(深層インタビューと民族誌的インタビュー)による質的調査であり、チベット語およびヒンディー語を使用した。インタビューの一部はインフォマントの許可を得たうえでICレコーダーによる音声記録を実施した²。

² タワン県の面積は2,172km²、総人口は49,977人、州内総人口の3.61%を占め、西カメン県の面積は7,422km²、総人口は83,947人で州内総人口の6.07%を占める(2011年国勢調査統計資料)。モンパは州内25の指定トライブ(Scheduled Tribe)のうちの一つに位置づけられている。

2 身近な神霊ルー

モンパ社会において、生活圏に棲むルーは身近な神霊である。各地に性格の異なる様々なルーがいるとされ、ルーは人間にとって豊穡や繁栄、幸福をもたらすよき神霊となる場合もあれば、害をもたらす邪悪な悪霊となる場合もある両義的な存在である。かつて人間や動物を喰った邪悪なルーが、密教行者や高僧によって折伏され仏教の守護者になったという伝承も様々な村で伝えられている。ルーの姿が図像に描かれることはほとんどないが、人面竜身の姿でイメージされたり、蛇がルーの化身として語られることが多い(図2)。例えば、タワン県北西部パンチェン地方の村では、ルーに関して次のような伝承が伝えられている。

【語り1. ショクツァン村のルーにまつわる伝承】

昔、パンチェン地方にオンブ・ドゥムという男がいた。あるとき、オンブ・ドゥムはブルックツイ・ツォという湖で大蛇を目にした。大蛇にはセルゴンマ(金色の蛇)、ングルゴンマ(銀色の蛇)、ユーゴンマ(トルコ石色の蛇)、チャーゴンマ(鉄色の蛇)などの種類があるが、オンブ・ドゥムが見たのは金色の大蛇であった。オンブ・ドゥムは雨合羽を地面に置き、大蛇に向かって手を合わせ「成功をください」と願った。大蛇は彼の雨合羽の上に嘔吐し去っていった。オンブ・ドゥムが雨合羽を家に持ち帰り広げてみると、大蛇の嘔吐物はトルコ石に変わっていた。それ以来、オンブ・

図2 人面竜身のルー (Dorje eds 1992)



ドゥムの家では牛乳を柄杓ですくうとあつという間にバターに変わるようになった。やがて彼の家は裕福となり、彼の家族や親戚の住む地域一帯がパンチェン地方の言葉で裕福を意味する「ショー」と、家族を意味する「ツァンカ」をつなげて「ショクツァン」と呼ばれるようになった。パンチェン地方のなかでショクツァン村は最も裕福な村となった。しかし、長い年月が経ちオンブ・ドゥムの家系が途絶えた後、ある村人がオンブ・ドゥムのトルコ石を手に入れ、その石で耳飾りをつくろうと考えた。彼はトルコ石に穴をあけるため鍛冶職人にトルコ石を預けた³。鍛冶職人がトルコ石を持って行った日の夜、村人たちはオンブ・ドゥムの家から山の上の湖へ9つの炎が移動していくのを目にした。それ以来、トルコ石は以前ほどの効力をもたなくなった。現在もオンブ・ドゥムのトルコ石はショクツァン村に保管されている。金色の大蛇は今もときどき湖の周辺に現れるが、人々に良いことをもたらす場合もあれば災いをもたらすこともある。それは大蛇を見た人間の心次第である。

(2015年11月1日パンチェン地方ルンポ村の村長からの聴き取り)

ショクツァン村の繁栄は、ルーの化身である大蛇によってもたらされたと伝えられていた。このように人々の生活に繁栄や幸福をもたらすルーは、家や村の守り神として崇拝された⁴。

モン地域では、ルーとの良好な関係を維持するために、地面を掘ったり、木を切ったり、石を動かしたりするときに必ずルーの許可を請わなければならないとされてきた。田畑が耕されるときは、香木を焚いて土地を浄化するサン儀礼 (*bsang*) が行われ、家を新築したり改築したりするときは、僧が呼ばれて浄化儀礼とともにルーに供物を捧げるルートル儀礼 (*klu gtor*) も執り行われる。

1年のあいだに何度かルーテブ (*klu thebs*) と呼ばれる日もあり、ルーが眠りから覚めて地上近くに這い上がる日とされるため、各家庭でルーのために浄化儀礼や供物儀礼が行われる。また、ルーテブの日に耕作や建築をするのは良くないこととされている。

家の台所にも、ルーと関わりの深いものが置かれる。それは、モンパ語で蛇を意味する「ムリ」とよばれる魔除けで、小麦粉とバターを混ぜて細長くし棒

³ 昔、鍛冶職人の血筋の者(ヤボ)は不浄であるとされていた。

⁴ モンパ社会において、土地の守り神と称されるサダックとルーは差異化されておらずほとんど同一視されている。

に巻きつけたものである。ムリは火床のそばに置かれることが多く、毎年チベット暦の正月（ローサル）に新しいものに取り換えられる。台所の火床が不浄になることはとくに恐れられており、例えば2016年2月20日タワン県中部の村でサンモ（70歳代女性）の家族とローサルを祝っていたとき、夫イシ（70歳代）が酒で酔った拍子にうっかり豚肉を台所中央の薪ストーブの上で焼いてしまった。それまで笑顔で世間話をしていたサンモとその娘ツァムチュー（30歳代）は血相を変えて激怒し、イシを大声で叱った。夜にもかかわらず大急ぎで香木が焚かれ、家じゅうが清められはじめた。モンパ社会において豚肉は不浄な食べ物の一つとして位置づけられており、このときサンモは「火床で豚肉を焼くなんて信じられない。火床が不浄になったら煙と一緒に不浄が家や周りに広がって神霊を怒らせてしまう」と語った。人々はルーへの影響をつねに意識し、家や田畑など身のまわりの生活環境を清浄に保つ努力をしてきたのである。

3 国境を行き来するルー

3.1 国境空間の形成

1950年代以降、インド領への移行や中印国境紛争を経てモン地域とチベットとの間に国境がつくられた。現地の人やモノの移動が変化するとともに、ルーに関する新たな語りが生み出されている。

チベット領時代、モン地域はチベットとアッサム間のトランスヒマラーヤ交易を中継する要所であった。さらに、交易だけでなく、チベットへの税や巡礼、移牧を通じてさかんに人やモノがチベット・ヒマラーヤを行き来していた。1914年のシムラ協定でチベットとインド間の国境線マクマホン・ラインが策定され、モン地域はチベットから英領インドへ割譲されることが取り決められた。しかし、協定は極秘に結ばれたもので中国政府の了解を得ていなかった。その後すぐに第一次世界大戦が勃発したため、イギリスがモン地域に介入することはなく、実際にはチベットによる支配が継続していた。インド独立後の1951年に、インド軍がモン地域におけるチベットの支配体制を解体したことで、モン地域は初めてインドの支配体制下に置かれることとなった。1962年に中印国境紛争が勃発し、中国軍が一時モン地域を占領する事態となったため、インド政府は紛争後にマクマホン・ラインを完全閉鎖した。モンパは、国境を超えてチベットへ交易や巡礼に出かけることが許可されなくなった。インド政

府は国境紛争をきっかけに、それまで辺境地とみなしほとんど介入してこなかったモン地域を「国境の防壁」として重視するようになり、軍地基地化と開発を本格化させた。最初にアッサムとタワンをつなぐ長大な軍用道路が建設され、多くのチベット難民や地元のモンパが建設作業に携わった。各地で軍事施設の建設も進められ、モンパは道路や軍事基地の建設に従事することでそれまで普及していなかったインドルピーによる現金収入を得るようになった⁵。国境の閉鎖で手に入らなくなったチベットの物資に代わって、道路を通じてインド製の衣類や食料品がもたらされるようになり、やがてモン地域にバザール（商店街や市場）が形成された。インド国民として生きる現在のモンパにとって、チベット本土は足を踏み入れることのできない遠い異国の地となったのである。しかし、その一方で国境を自由に行き来するルーの存在が語られている。

3.2 湖の出現

タワン県北部の国境近くにシヨンガツェルという場所があり、現在は軍の管理下に置かれている。シヨンガツェルはかつて平らな牧草地で、ヤクや牛を放牧する牧畜従事者たちのための野営地として使われていた。しかし、1950年8月15日に起こったアッサム・チベット地震（マグニチュード8.6）の影響で、大きな湖が突如出現し、広大な牧草地は湖の底に沈んでしまった。湖の出現は、ルーの移動と結びつけられ「チベットの湖からルーが逃げ出して、シヨンガツェルに住みついた」と次第に語られるようになった。やがて、シヨンガツェルの湖には無数の五色旗が掲げられるようになり、モンパの特別な聖地となった。他方、中印国境紛争の後、シヨンガツェルは国境近くであったためインド軍にとって軍事戦略上重要な場所となり、湖周辺に基地や監視塔が設置された。1990年代になると、ボリウッド映画「コイラ（KOYLA）」の一幕がシヨンガツェルの湖で撮影され、湖は一躍有名になり映画のヒロインの名前をとって「マドリレイク」とインドの人々から呼ばれるようになった⁶。湖底から木々が生えているようにみえるユニークな景観の「マドリレイク」は、インド人観光客がさかんに訪れる人気の観光スポットとなり、それをうけて州の観光省は遊歩道を整備し、インド軍は湖のそばでカフェの経営を始めた。国境空間に出現

⁵ チベット領時代に流通していたチベットの紙幣や硬貨は、すでに価値を失っていた。

⁶ 映画スターであるシャールク・カーンの主演で、1997年にインドで公開された。邦題は「コイラ―愛と復讐の炎―」。

したシヨンガツェルの湖は、モンパにとって重要なルーの聖地となる一方で、インド軍や州政府にとっても軍事拠点や観光資源として重要な場所となり、様々な人が集まる場となっているのである。

3.3 泉の枯渇

シヨンガツェルとは反対に、「ルーが逃げ出した」と語られるようになった場所もある。西カメン県のラゲラ僧院の近くには、モンパ社会に最初に仏教をもたらしたとされる天女ドワ・サンモの出生地がある。伝承では、猟犬を連れて狩猟にやってきたタワンの王カラ・ワンポが、猟犬を追ってドワ・サンモの家を訪れ、そこで美しいドワ・サンモと出会い結婚して仏教を信仰することになったという話が伝えられている。地元でドワ・サンモの畑といわれている丘を上がると、カラ・ワンポ王の猟犬の足跡とされる窪みのある岩やドワ・サンモの泉がある。これらの場所はモンパにとって重要な聖地であったが、国境紛争時には中国軍とインド軍の激戦地ともなった。ラゲラ僧院の住職によると、この丘でインド軍の一人の兵士が大勢の中国軍を相手に激しく交戦したすえ戦死したという。丘を占拠した中国軍は、ドワ・サンモの泉の近くに野営し、王の猟犬の足跡が残るとされる岩を破壊して、煮炊きのための火床に使用した。紛争後、インド軍は戦死したインド兵士を英雄と称え、ドワ・サンモの泉の近くに記念塔を建てた。その際、インド軍は見栄えをよくするため泉の周りをコンクリート塀で固めて整備したが、やがて泉はほとんど干上がってしまった。泉の枯渇について、住民のあいだでは「コンクリートで周りを固めたために泉の水が汚れて、泉に棲むルーがチベットかどこかへ逃げ出してしまった」と語られていた。

2015年に訪れたとき、中国軍に破壊された岩や枯渇したドワ・サンモの泉には多くの五色旗が掲げられ続けていた。ドワ・サンモの畑とされる丘には、錆びた鉄砲の弾丸やベルトの留め金も落ちていた。2015年はダライ・ラマ法王のタワン訪問が計画されていた年であったが、法王の身体の不調で延期されることがすでに発表されていた。ラゲラ僧院の住職は「もしダライ・ラマ法王が天女ドワ・サンモの聖地に来てくださっていれば、泉の水はきっと戻ってきていただろう。村の者たちもそう言っている」と残念そうに語った。住職は、泉が枯渇してからこれまでに何人もの僧を呼んで泉の浄化とルーを呼ぶ儀礼をしてきた。しかし、効果はなかった。

現地の文脈において、ルーが自分たちの土地にやってくることは豊穡や繁栄

がもたらされることにつながり、自分たちの土地から去ることは不作や衰退がもたらされることにつながる。1950年代以降インド軍やインド政府と関わりあうなかで生じたモン地域の環境の様々な変化は、国境に制限されることなく移動するルーの存在を通して再解釈され、ときに切実な問題として意味づけられているのである。

4 ルーと身体との結びつき

4.1 ルーがもたらす病い

ルーは、病気や身体の様々な不調とも関係づけられる。不浄に対して脆弱なルーは、住処となる環境が不浄になると弱り、怒って不浄をもたらした人間に対して病気や害を与えるとされる⁷。そのような病いをルネー (*klu nad*) と呼び、とくに手足の腫れやただれなどの皮膚病、ハンセン病をもたらすといわれている。例えば、タワン県中部の公立学校で英語教師をするチョーキー (20歳代女性) は、母ドルカルがルネーにかかったときのことを次のように語った。

【語り 2. ドルカルの赤く腫れた脚】

ある日突然、母は足首が痛くなり歩けなくなった。母の足は赤く腫れあがり、父は母をタワン県立病院へ連れて行った。病院の薬を飲んで足の痛みは一旦おさまったが、翌朝再び腫れた。なかなか治らなかったで、父は村の在家僧に相談に行った。占いでみてもらうと在家僧は「これはルネーである」と言った。母が湯で米を洗った際、台所の流し場に捨てたとき汁がたまたまルーの住む石に落ちてルーが怒り、母にルネーを与えたことであった。在家僧は、「家の軒下にある黒色に少し白色が混ざった石がルーの住む石である」と伝えた。父が家の軒下を見に行ってみると、本当に在家僧の言った通りの石があった。父は在家僧を家に呼び、香木を焚いてルーの儀礼をおこなった。その後、母の足の痛みや腫れは治まった。

(2012年2月1日の聴き取り)

ルネーは、病院の医薬品やチベット医学の伝統薬だけで治すことはできず、浄化儀礼によってルーの棲む場所を浄化し、さらに供物儀礼で塩やバターを捧

⁷ ネパールのシェルパ社会や北インドのラダッキ社会も同様である (Ortner 1978、山田1997)。宮坂は、ルーの病いを治療する方法についてルーに贖罪しなだめる、調伏する、傷つける行為をやめるなどがあるとする (宮坂2007)。

げてルーに許しを請わなければならない。供物を捧げる場所としてルーの祠（ルーバン *klu bang*）が設置されることもある。ルーバンは白く塗った土レンガでつくられ、装飾は施されない。タワン県北西部に暮らす夫婦ツェリン（60歳代女性）とケルサン（70歳代男性）は、数年前に二人とも腹痛となり薬を飲んでも改善しなかった。村の在家僧に相談したところ「ルネーである」と言われ、夫婦の畑の横を流れている小川にルーが棲んでいると告げられた。夫婦はその小川のそばにルーの祠を建て、在家僧を呼んでルーの儀礼をした（写真1）。二人の腹痛はやがて治まったとのことであった。

ルーは出産とも関連づけられている。「雷が鳴っているとき、ルーは妊婦の腹の中の赤ん坊を盗む」といわれており、前述のサンモ（70歳代女性）も自分の叔母が妊娠6ヶ月のときにルーに胎児を盗まれたと語った。彼女によれば、雷が鳴った日から叔母の大きかった腹は徐々に小さくなり、赤ん坊が出てくることのないままとうとう完全にへこんでしまったという。ルーは盗んだ胎児を別の妊婦の腹に入れ、その結果双子が生まれるとされる。ルーは、人間の身体に対しこのように様々な働きかけをする存在である。

写真1 ツェリンとケルサンの夫婦が建てたルーの祠



4.2 ルーの病いにならない人々

西カメン県のリスパ村に居住する人々（リスパ）は、ルーの病いにかからないといわれている⁸。モン地域では「リスパ語にはルーの言葉が含まれているた

⁸ 指定トライブの「モンパ」は、居住地域ごとに異なる言語を話す様々なサブグループに分かれている。

め、リスパはルーに愛されルーの病いにかかることがない」と語られている。リスパ語は、同県で広く話されているディランモンパ語やカラクタンモンパ語と大きく異なり、リスパ以外で話せる人はほとんどいない。リスパ語の由来について、次のような伝承が伝えられている。

【リスパ語に関する伝承】

昔、ディラン村の人々は朝早くに畑仕事をして昼に休み、その後リス村の人々が昼から畑仕事をしていた。リスパは、昼12時頃から畑仕事を始め、午後2時に食事をし、夜の9時に家に帰るというリズムで生活を営んでいた。ある朝、グル・パドマサンヴァバ（ロボン・リンポチェ）が人々を集めてそれぞれに異なる言葉を与えた。しかし、リスパは朝起きることができず遅れてやってきたため、すでに言葉は残っていなかった。グル・パドマサンヴァバは、他の人々に与えた言葉を少しずつリスパに分け与えた。それだけでは足りなかったのでルーの言葉も分け与えた。

しかし、リス村の村長は「最初にリスパがグル・パドマサンヴァバのもとにやってきたから、リスパに特別にルーの言葉が与えられたのだ」と語り、「リスパは遅れてきた」という話は誤りであるとした。彼は「もし即興的にいろんな地域の言葉を混ぜてリスパ語がつくられたということが事実であるのなら、なぜ他の人々も容易にリスパ語を話すことができないのか」と言い、リスパ語は一種の「ルーのマントラ」であるためリスパ以外話すことができないということを強調した。西カメン県において言語的少数派であるリス村の人々にとって、ルーは自らの固有のアイデンティティを支える重要な存在となっているのである。

4.3 ルー、環境、人間の連鎖

上層世界に住む天の神々ラ（*Lha*）と違い、ルーは水辺や地面のいたるところに棲み、しばしば人々の身体に働きかけてくる存在である。それゆえ、家や村の外でもルーに対して常に注意が払われていた。例えば、2016年3月12日タワン県北西部でドルマ（20歳代女性）とその息子（6歳）と一緒に森へ山菜摘みにでかけたとき、ドルマは「池のなかにシンルー（山菜）がたくさんあるけれど、それは採ってはだめよ。池から離れたところで採って。私は池のそばにいただけで怖いくらいよ」と忠告した。その池はルーの住処とされており、周囲の木々に五色旗がかけられていた。ドルマは、池から離れた場所で僅かに生え

るシンルーだけを摘み続けた。息子が「どうして池のシンルーは採っちゃダメなの」と尋ねると、彼女は「池には神様がいるから」と声を潜めて答えた。

タワンの木器（ドロム）職人ワンチュ（60歳代男性）は、木器の原料を森から調達するときにルーの怒りをかわないように気をつけていた。ジャップとよばれる特別な木のこぶを使った木器が最も高価であるという話をした後、彼は次のように語った⁹。

「水辺にあるジャップはどれだけ大きくてりっぱであっても採ってはいけない。そのジャップをとってしまうとルーが怒って、それを採った人間（牧畜民）やそれからドロムをつくった職人に対して病気をもたらすからだ。昔、妻が小川の近くで大きなジャップをみつけて喜び勇んで帰ってきたことがあった。妻は早く採りに行こうとしきりに言ったが、私は採りに行かなかった。」
(2016年3月20日の聴き取り)

ルーの病いにかかってしまうと、自分の身体を治療するだけでは十分ではなくなり、僧や密教行者を呼んでいかなる経緯で自分のふるまいがルーに害を与えたのかを説明しなければならなくなる。そのうえで、浄化儀礼と供物儀礼によってルーの住処から不浄を取り除き、ルーを回復させてはじめて病者自身の身体も治ることになる。つまり環境とルー、人間の身体は互いに連鎖しながら共に病み、共に回復するのである¹⁰。

一見別々の事象である「環境の変化」と「身体の不調」は、ルーという不可視の存在を介して一つの連なった出来事として経験されており、近年のモンパ社会における疾病構造の変化もルー、環境、人間の連鎖関係によって新たに解釈される。食生活や生業など様々な生活環境が変化した現代のモンパ社会において、深刻な慢性胃炎（Gastritis）が若年層や中年層に増え、高血圧症や糖尿病、癌などそれまで現地になかったとされてきたような病気が中年層から高齢層で経験されるようになった。これらの病気は、英語の医学用語がそのままモンパ社会で一般化しており、とくに開発以前を知る高齢者のあいだで「（道路建設などによる）土地の破壊でルーが逃げ出したせいで、妙な病気が増えた」という語りが生まれていた。かつてルーがもたらす病い（ルネー）は、手足の

⁹ ワンチュは、山で放牧する牧畜民からときどきジャップを購入していた。

¹⁰ ルーと人の身体的結びつきについて、デイは、ラダックにおいて飲み水や食料そのものがルーとされることがある点から、飲食物に姿を変えたルーが消化を通じて、さらに姿を変え人間の身体の一部として再構成されるということを論じている（Day 1989: 470）。

腫れや皮膚病、ハンセン病など肌の表面に症状が現れる病気や不調が大半であった。しかし、現在においてはそれ以外にも様々な病気が、病院の薬を飲んでもなかなか治らないときに「ルネーである」といわれるようになってきている。ルーは今もなお人々にとって重要であり続けているのである。

5 ルーとの関係を結びなおす

5.1 シェルヌップ村におけるルーの伝承

村人はどのようにして村の守り神であるルーと良好な関係を結び、それを維持してきたのであろうか。ここからはシェルヌップ村の事例をもとに、ルーとの関係を調整する村の人々の実践を述べていきたい。タワン県中部のシェルヌップ村は、タワンで最も古くから村があったとされるカルセニン地域のなかにあり、約20世帯が暮らしている。タワン県では数少ない稲作地帯で、広大な棚田に囲まれた円形集落を形成している¹¹。村のそばには、ツォ・マブチャという孔雀の形をしているとされる広い湿地があり、かつてそこは人間や動物を喰う邪悪なルーが棲む湖であったと伝えられている¹²。村の伝承によれば、邪悪なルーはタワンの高僧ラマ・テウによって追い出され、そのときに湖は干上がって湿地となった。その後、高僧は仏塔カヌンチョルテンを建立し、二度と邪悪なルーが戻って来ないよう儀礼をしたとされる（参考資料を参照）。

現在も、ツォ・マブチャの周りに伝承の痕跡が数多く残されている。湿地ツォ・マブチャのそばには「高僧ラマ・テウの宝石箱」とされる四角い岩があり、村の南側にはラマ・テウの左足の跡の残る岩、村の西側には右足の跡の残る岩がある。シェルヌップ村という名前の由来も伝承と関わりがあり、村のシャル（東）にラマ・テウの宝石箱、ヌップ（西）に仏塔カヌンチョルテンがあることからシャルとヌップが訛ってシェルヌップとなったとされる（写真2）。

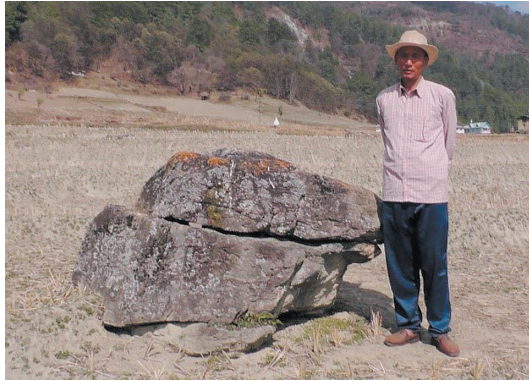
毎年正月になるとシェルヌップ村の人々は、高僧ラマ・テウが小屋を建てて住んだとされる空き地に集まり、伝統芸能アチェラモを演じてルーに稲の豊穡や村の繁栄を祈願してきた¹³。農繁期に雨の降らない日が続くと、普段は立ち

¹¹ カルセニン地域は、タワン県で比較的標高が低く温暖で稲が育つ。標高が高く稲が育ちにくい北部では、大麦やシコクビエが栽培される。

¹² ツォは湖、マブチャは孔雀を意味する。

¹³ 伝承の邪悪なルーとは別のルーである。

写真2 ラマ・テウの宝石箱



入り禁止であるツォ・マブチャのなかでアチェラモを演じ、ルーに雨乞いをしてきた。このアチェラモとは一体どのようなものであろうか。

5.2 伝統芸能アチェラモ

アチェラモは、ヤクチャムやセンゲガルチャム、キンチャムとともにモンパの村々で継承されてきた芸能の一つで、仮面や様々な衣装を身に着けた複数の演者たちが歌ったり踊ったりする演劇である¹⁴。アチェラモの歴史は古く、14世紀にチベットで高僧タントン・ゲルポ（1361-1485）によって創始されたとされている¹⁵。タントン・ゲルポは、チベットやヒマラヤ各地の河川に鉄の吊り橋を造った人物として知られ、一説には吊り橋をつくるための人手や資金を集めるために村の娘たちを集めて演劇を演じさせたのがアチェラモの始まりであるとともいわれている。インドとチベットの仏教説話をもとにした様々な戯曲がつくられた。

モンパのアチェラモでは、『チューゲル・ノルサン』という古典戯曲が主に演じられている。東インドを舞台とする二部構成の長大な物語で、第一部はルーと人間（漁師ニャバ）が協力し合う物語、第二部は菩薩の化身であるチューゲル・ノルサンが天女ラモと結婚する物語が展開する¹⁶（写真3、4）。主要な

¹⁴ アチェラモ（またはラモ）や種々のチャムはチベット・ヒマラヤ世界に広くみられる。ヤクチャムはヤク、センゲガルチャムは雪獅子、キンチャムはキンパというサルに似た神霊が登場する。

¹⁵ 演劇の俗称で、アチェは姉、ラモは女神を意味し、戯曲『チューゲル・ノルサン』に登場する天の女神に由来する（山口1987）。

演者は①ゲル（またはチューゲル・ノルサン。第二部の主人公で北の国の王子）、②ラモ（またはユトック・ラモ。天女でゲルと恋に落ちる）、③ラム（またはトンドー・ゼモ。ラモの妹）、④ニャパ（第一部の主人公で貧しい漁師）、⑤ニャロ（他の演者の助っ人で物語の展開には直接関係ない）の5名である。そのほか様々な脇役が登場する。

【アチェラモのあらすじ】

<第一部>

1. 南の国（人間界）

南の国は、王子の悪行によって衰退する。王子は、民衆を集め自分の国が貧しくなった理由を尋ねる。180歳の白髪で歯のない老人は、「王子の悪行を嫌って元来南の国にあったルーの湖が北の国に移動したために、南の国は貧しくなり北の国が豊かになったのです」と述べる。老人の話聞き、王子は密教行者に命じて北の国の湖を盗みに行かせる。

2. ルーの世界

北の国の湖の底にはルーの世界があり、ルーの女王は南の国の密使が湖を盗みに来ることを知って、人間の漁師ニャパに湖を監視させる。密教行者が湖を盗みにやって来たとき、ニャパは酒を飲んで居眠りをしていたため、ルーの女王はあわててルーの使いを送る。ルーの使いに起こされたニャパは、密教行者と対決し見事打ち負かして盗みを阻止する。ルーの女王は喜び、ニャパを湖の底のルーの世界に招待し宴席を催す。数日滞在して地上へ帰る際、ニャパはルーの女王から、願ったものは何でも手に入るという宝玉を贈られる。

<第二部>

3. 北の国（人間界）

ニャパは、宝玉の使い方がわからず洞窟に住む隠遁者のもとへききにいく。そこで、泉の水を汲む天女ラモに一目惚れする。ニャパは、天の神を捕まえることのできる特殊な縄がルーの世界にあるということを隠遁者から聞き、再びルーの世界へ行って、宝玉と特殊な縄を交換する。その縄でラモを捕まえる

¹⁶ スダーナジャータカを翻案したものである（山口 1987）。そのほか『スーキ・ニマ』、『ドワ・サンモ』、『ギャサ・コンジョー』、『ナンサ・ウーブン』、『ペマ・ウーバル』、『チュン・ドニョーとドゥンドゥップ』、『チョーゲル・ディンメー・クンデン』などの古典戯曲がある（Sagong Wangdu 2009）。

が、人間が天女に触れると天女は死んでしまうということを知る。隠遁者に諭されたニャパは、北の国の王子ゲルにラモを引き渡す。ゲルは菩薩の化身であるため、天の神々に触れることができる。ゲルとラモは結婚するが、ゲルの妻500人がラモを妬み、悪い僧とともに彼女を追い出すための策を講じる。ゲルが戦争に出かけた後、500人の妻と悪い僧の策略によって、ラモは生命を狙われ天界へ逃げる。戦争から帰ったゲルはそれを知りラモを追いかけて天界へ行く。

4. 天界

ゲルは天界でラモの妹ラムと出会い、彼女の助けを借りてラモとの再会を果たす。ラモの父である天界の王（顔は馬、体は人間）はラモが人間界に再び行くことを好まず、神々の王子たちとゲルに様々な勝負をさせる。しかし、ゲルがすべての勝負に勝利する。天界の王はゲルとラモの結婚を受け入れ、二人は人間界に帰還する。策を講じた妻500人と悪い僧は追放される¹⁷。

アチェラモは5日ほどかけて演じられ、ジョークを織り交ぜたユーモラスな演者同士の掛け合いも、村の人々に楽しまれてきた。アチェラモは、古来のルールと人間が助け合う理想の関係を、ルールと村人が互いに再確認する重要な機会であり、また村人たちにとって一年に一度楽しむことのできる大切な娯楽の場でもあったのである。

写真3 シェルヌツプ村のアチェラモ



写真4 天女ラモの衣装 (Abhishek Dev and Tsewang Norbu 2015)



5.3 ルーの聖地を守るための村人の交渉

チベット領時代、シェルヌツプ村の人々は収穫した稲の一部をチベット本土

¹⁷ シェルヌツプ村に住むアチェラモの元演者サンゲ（60歳代男性）の説明による。

やタワン僧院へ納税する義務を課せられていた。そのため少しでも多くの土地を耕し収穫量を上げることが重要であったが、例外的にツォ・マブチャは耕されずに空き地のまま維持されてきた。なぜなら、高僧ラマ・テウが「決してツォ・マブチャを耕してはならない」と村人たちに言ったと伝えられているからであり、村の守り神であるルーの住処を不浄にしてはならないとされたのである¹⁸。そのため、タワンを統括する3名の首長（ツォルゲン）が毎年シェルヌップ村を訪れ、ツォ・マブチャが空き地のまま維持されているかどうかを確認することが慣例になっていた。ツォ・マブチャの清浄さを保つことは、一つの村を越えてタワン全体で重要なことであったのである。

当時、村々の伝統芸能はチベット政府の管理下に置かれていた。正月の最初にシェルヌップ村のアチェラモの演者たちは、ほかの村の演者たちとともにタワンにあるチベット政府の地方官庁ギャンカル・ゾンに集まり、チベットの役人に対して伝統芸能を奉納することが決められていた。それを終えて初めて、自分の村や他の村で伝統芸能を演じることが許された。演者たちは自分の村で伝統芸能を演じた後、ほかの村々も巡回して伝統芸能を演じ村同士の交流を深めた。

しかし、このようなローカルな秩序は、1950年代以降に変容することとなった。1951年にインド領となったため、チベット政府の官庁はなくなり、タワンの首長制はインド政府のパンチャーヤット制度の導入によって失われた。これにより首長たちによるツォ・マブチャの視察の慣例も、ギャンカル・ゾンでの伝統芸能の奉納もなくなった。その後の中印国境紛争において、シェルヌップ村は中国軍の駐留する野営地となった。同村のアチェラモ元演者サンゲ（60歳代男性）は、このときツォ・マブチャが不浄の危機に見舞われたことを語った。

【語り3. ツォ・マブチャの危機】

シェルヌップ村の近くに中国軍はテントを建ててしばらく野営していた。村を出て避難した人もいたが、私（サンゲ）は当時9歳でまだ幼く村に残っていた。中国軍から当時珍しかったアメ玉をもらって嬉しかったのを覚えている。中国軍は、村人に暴力をふるうことや物を盗むことはせず、テントで自炊していた。しかし、中国軍はツォ・マブチャが聖なる土地であることを知らなかったため「ちょうどよい空き地がある」と思ったのだろう。ツォ・マブチャのなかに便所を設営してしまった。村の人々は

¹⁸ 土地を耕すと、土の中の小動物や虫を殺生してしまうため。

ツォ・マブチャが不浄になることを非常に恐れて、村長と相談した。村長は自ら中国軍の野営地へ出向き、ツォ・マブチャが重要な場所であることを説明し便所の移動を求めた。中国軍のなかにチベット人が通訳者として同伴していたため、村長は中国軍と話をすることができた。中国軍はツォ・マブチャが聖地であることを知ると、便所を設営したことを詫び、すぐに別の場所へ便所を移動させた¹⁹。そのあと村長は中国軍の晩餐会に招待された。
(2016年3月2日の聴き取り)

シェルヌップ村の人々は、ときに中国軍とも交渉しルーとの関係が悪化しないために力を尽くしたのであった。ツォ・マブチャは現在も耕されることなく、シェルヌップ村と隣のジャンカル村の共有地として管理され続けている²⁰。

5.4 伝統芸能の変化

一方、シェルヌップ村のアチェラモはサンゲたちの世代が高齢となった後、次の担い手がみつからず約20年途絶えることになった。これについて、次の4つの社会的変化との関わりを指摘しておきたい。

(1) 稲作の重要性の低下

アチェラモは、ルーに対する豊穰祈願や雨乞いの意味合いをもっていた。チベットへの納税義務がなくなり、さらにインド政府による白米配給制でインドの米が安価で手に入るようになったことで、米を収穫することは以前ほど切実な問題ではなくなった。ほかの仕事に従事する村人も増え、農業やアチェラモの儀礼としての重要性は低下した。

(2) アチェラモに対する若い世代の関心の希薄化

テレビの普及でボリウッド映画やポップミュージックなどの娯楽が手軽に楽しめるようになり、村の伝統芸能に関心をもつ若者が減った。数人の高齢者か

¹⁹ サンゲによれば、中国軍はモンパの子どもたちによくアメ玉を配っていたという。ほかの村では中国軍が村人の農作業を手伝ったという話もあり、中国軍はモンパに対し協力的なふるまいをすることで「同じ仲間である」ことをアピールしていたといわれている。

²⁰ 村の周囲には、高僧ラマ・テウの神通力で湧き出したとされる4つの泉が東西南北それぞれにあった。しかし、北の泉は数年前に干上がってしまい、村の人々は泉の近くが何らかの理由で不浄になったためであろうと考えていた。ほかの3つの泉は、慢性胃炎や妊婦の病気除けに効果があるとして村で大切に利用されていた。

らは「今の若者はアチェラモがどういう話かということすら知らない」と語られた。また、多くの若者が教育や仕事のため村外へ出ていくようになり、村で生活する若者の人口自体も減少した。

(3) 村同士の関係の希薄化

かつてタワン県中部と南部は3名の首長のもと複数の村が連帯していた。しかし、首長制がなくなりパンチャーヤット制により1つ1つの村に村長（ガンブラ）が置かれることになった。さらに地区レベル、群レベルでも複数の代表者が地方自治を担うようになり、村はそれぞれ別々に運営されることとなった²¹。村同士の関係は以前より希薄化し、伝統芸能を通じて互いの村が交流を深める機会も減少した。

(4) 伝統芸能のショー化

インドの記念日が祝われるようになり、インド政府の関係者やインド軍の前でモンパの伝統芸能が披露されるようになった。伝統芸能は、演劇の要素を除いた数分間のダンスショーとして披露される機会が増えた。他県への興行も行われるようになった一方、村で親しまれてきた演劇としての伝統芸能はあまり重視されなくなった。

こうした様々な背景のもと、ほかの村々の伝統芸能と同様、シェルヌップ村のアチェラモも過去の記憶となりつつあった²²。村の仏塔カヌンチョルテンも修築する資金が賄えず荒廃し、村人たちはルーとの関係に不安を感じながらも長い間どうすることもできないままであった。

5.5 聖地の修復と伝統芸能の再開

チベットとのつながりが断たれた後、モン地域の僧院や尼僧院、聖地は荒廃

²¹ 現在のガンブラも村人から「ツォルゲン」と呼ばれることがある。しかし、チベット領時代のツォルゲンと現在のガンブラはその地位や権力に大きな違いがある。チベット領時代のツォルゲンは複数の村で構成されるツォを統率する権限を有したが、ガンブラの権限は1つの村の枠内に限られる。

²² 若手の不在が続いた20年間で一度、2008年にアチェラモによる雨乞いが復活した。すでに引退していた演者たちによって1日だけアチェラモがツォ・マブチャで演じられた。演者の一人であったサンゲは「ツォ・マブチャは少し水が張ってぬかるんでいた。そこで朝から夕方まで踊ったんだ。その日の夜にはもう雨が降ってくれたよ」と語った。

した²³。南インドのチベット仏教僧院で修行を終え帰郷した高僧ツォナ・ゴンツェ・リンポチェ（タワン県出身、1967-2014）は、モン地域の文化復興運動を1980年代から開始した。1987年に NGO 団体「仏教文化保護協会」（Buddhist Culture Preservation Society）を西カメン県で設立した後、1994年にタワン県で選挙に出馬し州政府の政治家となった。1990年代後半から2000年代にかけてツォナ・ゴンツェ・リンポチェは州議会議員（Member of Legislative Assembly、略称 MLA）として、モン地域の文化保護と開発の両立に取り組み、僧院や聖地の改修のほか、新しい大学の開設や機械技術の訓練所の設置など多くのプロジェクトを実施した²⁴。彼の先導のもと、文化復興運動を推進する若い社会活動家たちが登場し、モンパの「文化」や「アイデンティティ」の保護を主張するローカル NGO が次々に生まれた。

とりわけ、ルーと関わりの深い仏塔ゴルサム・チョルテンの改修は多くの人を巻き込み、モンパ社会に強いインパクトを与えた。

【仏塔ゴルサム・チョルテンの改修事業】

タワン県北西部に建つ仏塔ゴルサム・チョルテンは、モン地域最大の仏塔である（写真5）。12世紀にタワンの高僧が邪悪なルーをこの地で折伏し、ネパールの巨大な仏塔ボーダナートに似せてこの仏塔を建立したと伝えられ、近くの山にはルーの棲む聖なる池があった。1950年のアッサム・チベット地震や河川の洪水などで仏塔はいたるところに損傷を受け、地元の人々は修築のための資金を賄うことができず、仏塔は荒廃した。

ツォナ・ゴンツェ・リンポチェは、州政府のプロジェクトとしてこの仏塔の改修を2006年に実施した。その際、仏塔そのものの改修だけでなく、不浄となった聖地の空間全体の浄化も行われた。ツォナ・ゴンツェ・リンポチェは、仏塔の上の山々を通る軍用道路の排気ガスや砂塵が、聖地全体を不浄にしているとして仏塔の下側に軍用道路を移設し仏塔の周りを壁で囲んだ。さらに、不浄にさらされることがないようにルーの聖なる池を仏塔のそばへポンプを用いて移し、キンメイ・リンポチェ（密教の高僧）によってルーのための儀礼が執り

²³ アルナーチャル・プラデーシュ州において仏教徒コミュニティは少数派であり、州政府が僧院や聖地の荒廃に対して支援を行うことは1990年代までほとんどなかった。

²⁴ ヒマラーヤ文化大学（Central Institute of Himalayan Culture Studies, Dahung）が西カメン県に新設された。一般教養科目のほか仏教哲学やサンスクリット語などの専門科目があり、その学位も取得できる。

行われた。この改修事業に12000人を超える一般の村人たちが集まり、ボランティアで作業に協力した。

仏塔ゴルサム・チョルテンの改修事業は、現地の人々にとってルーとの関係を再び結びなおす重要な取り組みの一つであったといえる。興味深いことに、アチェラモの物語において密教行者は神通力を使ってルーの棲む湖を移動させようとしたが、この改修事業では神通力の代わりに近代的な機械の力を使って実際にルーの池の移動が実行されたのである。多くの村人が改修事業に協力した背景には、「文化」や「アイデンティティ」の保護を訴える社会活動家たちの働きかけだけでなく、文化復興運動が始まる以前から村の人々が日々の暮らしのなかで意識し続けてきたルーとの密接な関係が大きく関わっている。

2010年代から、伝統芸能は徐々に各地で再開され始めた。シェルヌップ村でも2014年に若い後継者たちが現れ、まだ完全な習得には至っていないものの2015年の正月から村でアチェラモが再開された。2016年にシェルヌップ村のアチェラモを見学したとき、60歳代から70歳代の元演者たちが厳しい目で終始若手たちの掛け合いや歌、踊りを見つめていたのが印象的であった。元演者たちは、度々若手の演技を止め細かい身振りや手振りを熱心に指導し、重要な見せ場となる長い朗誦の場面ではまだ覚えきれていない若手の横に元演者が立ち、高らかに朗誦していた（写真6）。

アチェラモの再開だけでなく、シェルヌップ村の人々は2013年に村で寄付を募り荒廃していた仏塔カメンチョルテンを新たに建て替えた。2015年には、ツォ・マブチャのそばに新しくルーの祠が設置され、ルーとの関係を結びなおす取り組みが村人主体で始められていた。

写真5 仏塔ゴルサム・チョルテン



写真6 若手のニャパ（左）に代わって朗誦する元演者（右）



6 小括

本稿は、モンパ社会を事例にこれまで論じられることの少なかった現代の神霊ルーと人々との関係を分析し、20世紀後半以降のヒマラヤ社会におけるローカルな社会空間の再編のありかたを論じた。モン地域において、国境紛争やインド政府による開発の進展は従来の食生活や生業、物資の流通や移動のありかたに大きな変容をもたらした。しかし、家や村の守り神とされてきた神霊ルーと現地の人々とのつながりは、国境紛争や開発によって必ずしも断絶したわけではなく、ルーは身近な神霊として現在も意識され続けていた。

インドと中国間の国境となり、インド政府や軍と現地住民が相互に関わり合う現在のモン地域の社会空間において、新たに経験される環境の変化や身体的不調はルーの移動やルーによる働きかけとして現地の文脈で再解釈され、ルーをめぐる新たな語りが生み出されていた。さらに、1980年代後半以降は、モン地域で活発化する文化復興運動を背景に、ルーとの関係を結びなおす動きも広がっていた。伝統芸能の再開や聖地修復の動きは、「アイデンティティ」や「文化」の保護を主張する社会的エリートによる上からの働きかけだけで進展したものではなく、村の人々が長く共有してきた日常に共在するルーに対する配慮の意識が深く関係していた。以上の点から、神霊ルーは「失われつつあるローカリティ」の一部ではなく、むしろ「新たなローカリティ」を生成する重要な媒介項となっているといえることができる。現代における環境や身体、社会の変容は神霊ルーを媒介に現地の文脈で再解釈され新たな交渉を生み、ローカルな社会空間が再編されていくのである。

参考資料 シェルヌップ村のルーの伝承

①首長がラマに助けを求める

大昔、シェルヌップ村がまだなかった頃、そこには大きな湖ツォ・マブチャがあった。湖に棲むルーは、湖に近寄る人や動物を喰ったり災いを与えたりした。ティソン・デツェン王（チベットの王）の時代、タワンの3人の首長（ツォルゲン）は、密教行者グル・パドマサンヴァバの弟子ラマ・テウ（以下ラマ）に助けを求めた。ラマは瞑想修行中で何も語らなかった。ツォルゲンたちは策を

講じ、ラムが早朝花を食べに出かけるため、事前にローカル酒を花に撒いた。ラムは鹿に変身して花を食べに行き、酔っぱらった。ツオルゲンたちは、ラムに五体投地をして湖の災いを鎮める方法を改めて尋ねた。ラムは1週間後にまた来るよう答えた。1週間後、ラムはツオルゲンたちと湖へ向かった。

② 2匹のルーの逃亡

途中、テリという場所でラムは休息をとった。そこで、ラムは湖の方に向かって儀礼を行った。その儀礼の供物のなかに人間の長い脚1本があるのを見て、湖のルーはラムに恐怖し、地震が起こったかのように湖面が激しく波打った。ラムはそれを見て「私は湖を消し災いを止めることができるから安心せよ」と人々に告げた。湖を見渡せる山の上へ行き、ラムは3週間の瞑想に入った。ラムはツオルゲンたちに「瞑想が終わるまで、自分のいる場所や湖に人や動物を決して近づけないように」と伝えた。瞑想に入ってから2週間が過ぎたとき、湖の中から2匹のルーが現れ空へ飛んで行った²⁵。

③ 仏塔カヌンチョルテンの建立

ラムは3週間の瞑想を終えて儀礼を行い、湖の方角に供物を放った。放たれた供物が空を舞うと、雲が立ち込め風が吹き荒れ、雨が降り出し、雷鳴がとどろいた。雹が湖に降り注ぎ、湖はたちまち干上がった。ツオルゲンや村人たちは喜び、ラムに感謝した。ラムは、再び湖が災いをもたらさないよう湖跡のそばに仏塔カヌンチョルテンを建立した。さらに、ラムは湖から東西南北の方角に向かって儀礼をし、4つの泉が湧き出した。ラムは、ツオルゲンや村人たちに「湖の土地を決して耕してはならない」と言った。

参考文献

[日文]

スタン, R. A. (1971). 『チベットの文化』 山口瑞鳳、定方晟 (訳)、東京：岩波書店。

²⁵ 近隣のクリモ村の古いマニ石には岩に2匹のヘビの痕跡があり、このときに飛び出したルーであると言い伝えられている。

宮坂清. (2007). ラダックにおけるルー信仰と病い. 『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』 64: 107-119頁。

山口瑞鳳. (1987). 『チベット』 (上) 東京大学出版会.

山田孝子. (1997). 西チベット、ラダックにおける病いと治療. 山田慶兒、栗山茂久 (共編). 『歴史の中の病と医学』 京都: 思文閣出版. 567-590頁。

[英文]

Abhishek Dev and Tsewang Norbu. (2015). *Enchanting Tawang*. New Delhi: The District Administration Tawang, Director of Research and the Department of Tourism, Government of Arunachal Pradesh.

Day, Sophie. (1989). *Embodying Spirits: Village Oracles and Possession Rituals in Ladakh, North India*. Ph.D. thesis, London School of Economics and Political Science (University of London).

Dorje, Gyurme (eds). (1992). *Tibetan Medical Paintings: Illustrations to the Blue Beryl Treatise of Sangye Gyamtso (1653-1705: Plates and Text)*. New York: Harry N. Abrams.

Ortner, Sherry B. (1978). The White-Black Ones: The Sherpa View of Human Nature. James Fisher, (ed). *Himalayan Anthropology*. The Hague: Mouton. pp. 268-285.

Sagong Wangdu. (2009). *A Hundred Customs and Traditions of Tibetan People*. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives. translated by Tenzin Tsepak.

Wiley, Andrea S. (2004). *An Ecology of High-Altitude Infancy: A Biocultural Perspective (Cambridge Studies in Medical Anthropology)*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.

長岡 慶（ながおか けい）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科
（博士課程）

岩尾一史・池田 巧（編）

『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』

京都大学人文科学研究所 2018年3月刊

謝辞：本研究は京都大学教育研究振興財団（2013年度）および日本学術振興会特別研究員 DC（2014年度）の助成を受けた。本稿の執筆は、2016年6月11日京都大学人文科学研究所の共同研究班『チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究』の研究会における報告内容をもとにしており、研究班のメンバーの方々および指導教員である藤倉達郎先生から多くの助言と有益なご指摘をいただいた。また、インドでの調査は現地の方々の協力によって可能となった。ここに記して謝意を表したい。